

## 初期日西交渉史上の一問題：秀吉のフィリピン招撫 をめぐって

箭内，健次

<https://doi.org/10.15017/2335120>

---

出版情報：史淵. 61, pp.27-36, 1954-06-10. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# 初期日西交渉史上の一問題

—秀吉のフィリピン招撫をめぐつて—

箭 内 健 次

豊臣秀吉が天正十八年の小田原の役によつてほぼ天下統一の業を成就した後、ゴアのポルトガル總督、朝鮮、フィリピン或は高山國（臺灣）に對して試みた一連の外交交渉は、強硬外交又は侵略外交の名において唱えられているが、その意圖、原因については種々の評價が與えられている。すなわち國內統一の餘力を驅つて海外に勢威を示そうとする秀吉の個人的欲望によるものとするもの、又彼が統一による大名の眼を海外に轉ぜしめつゝその間に自己の政權の基盤を堅めようとする意圖より出たとするもの、又次第に増大しつゝあつた國內商業資本の要望に應える點に重點をおくものなどがその主要なものであるが、今日尙決定的段階に達してはいない。しかし何れの場合にも相手國はこれを以て大規模な「倭寇」と見做していたことは共通でありこゝに倭寇の性格の一斷面が示されていたことは否定できない。このうち朝鮮問題——對明交渉——は古來多くの研究があり、又高山國についても既に發表されているので、こゝに残されたフィリピン交渉——現實には招撫であるか——についてとり上げその性格を究明したいと思ふ。

秀吉のフィリピン招撫はさう迄もなく天正十九年（1591）彼が時のフィリピン長官ゴメス、ペレス、ダスマリニヤス（Gomez Perez Dasmarias）に書を贈つて入貢を求めたことに始まる。以後三年に亘り彼我の間に使者の往來が行われたが、兵を動かすことなく秀吉の意嚮は十分に實現を見ずして終つた。秀吉に積極的に兵を進める意圖が存在したか否か

は明瞭ではないが、その家臣長谷川宗仁のごとき十萬といひ一萬といひ派兵の準備すら整えたといふ噂さはフィリピン側に傳えられ、この事は統治の日尙淺いイスパニヤ政廳にとつては由々しき大事であつたに相違なく、従つてマニラ城壁の築造、軍船の裝備その他對策に大軍であつた。しかしこのような防衛態勢の整備とともに他方外交手段によつて攻略を阻止するため策を弄し、或は使節の資格について疑義ありとし、又國書の紛失を理由として屢々使者を日本に派遣して秀吉側の戰意を弱めるとともに、かねがねの懸案である宣教師——ことにフランシスコ派——の日本渡來を試みた。

このようなフィリピン政廳側の方針に對して秀吉の態度はむしろ消極的であつたと考えられる。この事はもとより當時並行して行われていた半島出兵即ち文祿の役という重大事件に秀吉の關心が全く奪われていたことが最大の原因ではあるが、しかし彼としては兵を動かさずして招撫の目的を達成することが望ましい事であり、加えてフィリピン政廳がさきの方針に則り、使者の往復を重ねて遷延策をとつたことを目して自己の意圖の既に成就したとの自慰の念を秀吉に抱かしめ、結局イスパニヤ政廳外交の弄中に陥つたと見るべきものであらう。元よりフィリピンよりのフランシスコ派宣教師の渡來はジェスイット獨占の日本教界を混亂せしめ、延いては慶長元年のサン、フェリペ號事件から、やがては長崎における二十六人の殉教へと導かれていくことにはなつたものの、外交技術の點のみから見れば明かに先方の勝利と目すべきものであつたと考えられるのである。

本事件の概略は敘上の通りであるが、その發端をなすものはさきの秀吉の天正十九年九月十九日付書翰に示されるごとく原田孫七郎なるものの進言である。そして原田はフィリピン往來の一商人として彼地の事情に通曉するうち、フィリピンの防備薄弱なのを知つて長谷川宗仁を通じ秀吉に入貢方を進言したのが通説である。原田孫七郎なる人物についてはいかなる出自か不明であるが彼の名は一五九〇年（天正十八年）六月五日、マニラにおいて、司教サラサル（Domingo

de Salazar) に對し、日本布教のために教師派遣方を訴願した四人の日本人の一人ガスバル、マゴヘチ (Gaspar Maris ojechi) と同一人なるべく、又これより三年前一五八七年七月四日、サラサルより訊問をうけた十一人の日本人の中のパブロ、フアラランダ、ヒエニ (Pablo Faranda Jieni) と、マゴヘチと並記されたパブロ、ヒエニ (Pablo Gimon) とは恐らく同一人なるべくこれはメスコ (Mesco) 即ち都生れとあるから彼も恐らく都生れの商人かと推測される。<sup>(6)</sup> 尙フィリピン交渉においては原田彌七郎の外に彼の主人と稱せられる原田喜右衛門の名が屢見え、喜右衛門は又彼の高山國に對する交渉にも活躍するなど兩原田は秀吉の對南方政策の立役者のごとき觀を呈している。しかし、これは兩原田の個人的意圖から出發したものであらうか。今この問題を考えるに當り、秀吉招撫事件の起る直前の日本とフィリピン關係を考究してみよう。

兩國關係成立の機縁をなすものは天正十二年(一五八四)マニラよりマカオへ向う商船が難風に遭つて平戸に入港したことに始まるが、それ以前において日本船の彼地に赴くものが少くなかつた事は多くの記録の證するところである。しかもイスパニヤ人のフィリピン經略開始以前から行われ、以後もいわばイスパニヤ人とは無關係に原住民との間に交易が行われていた。この事は明朝政府の倭寇取締強化の結果、中國沿岸を避けて距離的には近接するこの島に現われ、やがて中國よりの流民等を主体とする商人群と相會するや、こゝに相集りフィリピンを中繼地とする出會貿易が展開されるに至つたものと推察される。したがつて日本からの交通は早くから行われながらもそれはイスパニヤの統治に關係なく行われ、いわば「倭寇」の亞流とも見做されるものであつた。ルソン島の西北部には「日本の港」という名で呼ばれた地點が存在したこともその狀況を察知しえられ、又一五八二年治安維持の名目でイスパニヤ政廳が軍船を北部ルソンに派遣した際にはカガヤン河口において日本商船團と交戦したことによつても彼らが武装商船隊の性格をもつていたと考えられる。<sup>(7)</sup>

彼我の間のいわば公式の交渉はさきの平戸來航による松浦氏と政廳との接觸までイスパニヤのフィリピン經營開始以後

十數年を経過した。(一五七一年のマニラ占據を一應統治の初めとする)なぜこの間フィリピン政廳は日本船の往來を知りつゝ敢て日本との交渉を行わなかつたのであらうか。

イスパニヤもポルトガルと同様その東洋進出の目的は香料産地の獲得とともに、カタイ、ジパング到達への夢を抱いていたことは否定できない。しかしながら途上において新大陸を「発見」し豊富な銀鑛の存在に狂喜した彼らは大陸經營に力を注ぎ、西方への遠征の時期を遅延せしめたこと、ローマ法王による發見地分割線 (Line de Demarcación) の設定に伴う諸協定の締結——ことに一五四二年のサラゴサ協定の締結とポルトガルのモルッカ諸島經營の進捗とは最早劃定線以西への進出の理論的根據を失わしめた。したがつてモルッカ諸島以西への進出は少くともポルトガルの妨害なくしては行われえない事になつた。しかし過去における東洋進出の野望は一朝にして捨て去るべくもなく、こゝに協定の違背を覺悟の上で東洋への足場を築くため遂にフィリピン諸島を占據するに至つたのである。フィリピンこそはモルッカを失つたイスパニヤの東洋における唯一の足場であつた。したがつて彼らはフィリピン占據後豫ての意圖であるシナ及び日本への進出を試みたのは當然の事ながらその際絶えずポルトガルへの顧慮を忘れなかつた。すなわち強い熱意はもちつゝも表面は消極的であつた。例えば一五七五年明の海酋林鳳のフィリピン侵攻にあたりその制壓に派遣された王望高の歸國に便乗して渡明の計畫を行つた場合のごとき<sup>(1)</sup>、又日本の場合、故意に日本近海に船を近接せしめることを期待しつゝもポルトガルと出會うことを警戒せしめたこと<sup>(2)</sup>、何れもその現われであつた。

このような形勢に加えて彼らのシナ、日本への進出を阻む契機が更に作られた。すなわちローマ法王によるジエスイト東洋布教獨占の勅書の公布である。ポルトガルは逸早くマラッカ占領後、モルッカ諸島に對する香料貿易獨占の計畫とともに、北部すなわちシナ大陸への進出を試み、明政府の取締りにも屈せず、沿岸諸商人との密貿易の形式による提携によ

つて經濟的基礎を堅め遂にはマカオの獲得となつて一應の成功を示した。しかも彼らの貿易による開拓と不離不則の關係においてジェズイトによるキリスト教の布教が試みられそれはシナ大陸よりも、後に開拓された日本に對し集中的に展開された。そして當時の日本國內の社會的・政治的・宗教的諸事情とこれに對應する彼らの貿易布教の一体化による政策の結果、東洋における最大の布教圏が建設されるに至つた。この布教の成功はローマ法王廳においても豫想以上の成果と評價された。このような現實の上に立つてローマ法王クレゴリオ十三世は一五七八年二月勅書を公布し東洋のすべての地を彼らの活動の地と公認した。このことは主としてフランシスコ派アグスチノ派等の諸派を以て占められたフィリピン在住のイスパニヤ系宣教師にとつては重大な問題であつた。<sup>(11)</sup>カトリックにおけるローマ法王の權威を考へるとき、彼らが益々日本及びシナに進出を躊躇するに至つたことは想像に難くない。

もとより彼らが日本進出を控へた理由は叙上の政治的要因の外に經濟的要因のあつた事も考へられる。初期の日比貿易についてはもとより數量は判明しないが商品としては銀を持參し金等の舶載を主としたものの如くである。<sup>(12)</sup>しかもポルトガルが日本貿易において獲得した奇蹟的巨利の事情はイスパニヤにおいては適用されなかつた。すなわちこの奇蹟を克ち得るためにはシナ及び日本の港に強固な地盤をもつことが先決條件であつたからシナに進出するためにはポルトガルとの烈しい抗争不可避の彼らには所詮不可能であつた。加えてマニラ開市後華僑の進出目覺ましく、彼らによつて舶載されるシナ商品は群島内に消化されて更にメキシコ——延いてはイスパニヤ本國へ持運ばれその間の中間利潤がフィリピン在住イスパニヤ商人の大きな魅力となつてからは日本への貿易に對する熱意はむしろ冷却する有様であつた。一六二四年(寛永元年)日本とフィリピン間の公的交渉の途絶するまでイスパニヤ人の日本貿易は概ね叙上の方向をとつていた。

一五八四年マニラ船の平戸來航は難風を避けて入港という形式をとつてゐるがこれは單なる避難でなく、さきに擧げた

イスパニヤ人の日本進出の形式をとつたものと見られる。しかもポルトガル人の開拓した航路によるイスパニヤ人の日本渡來はこれ以前から見られ、日本進出の氣運は或程度醸成されてきていたことは否定できない。しかも當時日本教界は布教の最高潮期にあたり、宣教師の不足に悩んでいた。しかも平戸はかつての最大の貿易港でありながら領主松浦氏のキリスト教徒抑壓政策に禍されてポルトガル船の入港を長崎に奪われ沈滞の状態にあつた。したがつてこのイスパニヤ系宣教師の渡來はこれを機縁として外國貿易を自領に吸引しようとする松浦氏によつて大いに歓迎されることであり、同時に又宣教師不足に悩む教界にとつてもむしろ望ましいき渡來でもあつたといえよう。こゝに同船に乗船のアグスチノ派教師パブロ・ロドリゲス (Pablo Rodriguez) を通じ、松浦領信からフィリピンのイスパニヤ政廳への交渉開始の呼びかけと日本教界の主宰者である副管區長ガスパル・クェリョ (Gaspar Coelho) からサラサル司教への依頼とが行われたものであろう。

このようにして開始された日本とフィリピンとの公的關係は日本側の積極的態度によつて推進された。すなわち松浦氏による交渉は翌一五八五年(天正十三年)から連年に亘り行われた。もとよりその船隻も年一―二隻程度であつたらしいが進貢物を携え教徒を交えたこれら使節船は、フィリピン政廳を喜ばせたことは明かであつた。従來倭寇の流れを汲む武装商船團に悩まされていたフィリピン政廳側ではこゝに「平和的」な日本人の渡來をみ、その中に教徒をふくんでいたことはやがて日本人教徒管理の問題を生じたのである。チリーノの書に見える都生れのガブリエルとは前掲の諷問書中に見えるガブリエル・ナガノ・ヨヤモン(長野與右衛門?)と思われこの教徒管理はやがて在住日本人の増加に伴いマニラ日本町の淵源をなすに至つた。

政廳においては日本との交渉開始延いては「平和的」日本人の渡來は従來警戒を要する諸國の一として擧げた日本に對する危険を軽減する上に甚だ望ましいものであつたから一般商人よりもむしろ教徒が歓迎された。彼らはいかなる経路を

經てマニラに到着したかは不明であるが恐らく大村船又は松浦船などに乗船したもので、その一部の名は明かにされてゐる。<sup>(18)</sup> すなわち一五八八年には司教の訊問に答えて日本の國情を傳えていることはイスパニヤ人の對日關心のほどを窺うことができるであらう。

しかもこの兩國の友好關係は短期間にして消え、數年後にはさきの秀吉の入貢要求という事件となつて表面化してゐる。同時にこの間イスパニヤ船が松浦氏の來航に應じて日本に派遣されたことも見當らない。又さきのコエリヨからサラサルへの書翰に應じてフィリピンから日本入國を決定した事實も發見されないがこれは矢張りローマ法王の勅書の影響に外ならない。すなわち東洋布教の獨占權を與えられたジエスイットは更に一五八五年の勅書によつて更に特權を確認されたから、<sup>(19)</sup> 日本の宣教師の不足から計畫されたフィリピン教師招人の申出も實行不可能にさせたものと思われる。

兩國關係は一五八九年ごろより急激に惡化したようである。この年マニラに來つた巡歴者風の日本人教徒三四十人が市内各處を視察した際スパイ視されたことが報告されてゐる。<sup>(20)</sup> 勿論これは秀吉の入貢要求表面化した際に想起された情報であることから必しもその當時の状況ではないにしても日本人に對する疑心暗鬼の感情が生じていたことは想像に難くない。このような感情の變化の原因については明確には判らないが恐らく前年すなわち一五八八年に發覺したフィリピン原住民の「隱謀事件」が契機と考えられる。

もともとイスパニヤ人がフィリピン統治を行うにあつて原住民側からの抵抗が行われたことは當然であつた。しかも原住民への壓力は主として經濟的面において表面化した。<sup>(21)</sup> いまその代表的なものとしてトリブト制 (Tributo) —— 人頭税に準ずべきもの—— を擧げることができる。すなわち原住民より歸服の徴として年に一定額の貢金を納付せしむるものであり資源尙乏しい同島よりのいはゞ最大の財源として對原住民政策の根幹をなすものであり、これが徴收をめぐつて人と教師との間に烈しい論争が展開された。その結果教師の反對は破れ徴收が執行された。そしてイスパニヤ政廳は從來よ



り存在した各部落 (Barangay) の首長に徴收の全責任を負わしめたため、首長の立場は極めて苦難であつた。このような事情はやがて首長間において秘かにイスパニヤ勢力打倒の運動を計畫するようになったが、その最も大規模な運動が一五八七年に秘密裡に計畫された。これはマニラに隣接するトンド部落の首長アグスチン・デ・レガスピ (Agustin de Legaspi) マルチン・パンガ (Martin Panga) を中心に有力な首長の間に連繋がとられ、さらにボルネオ、ミンダナオ、ホロ等の首長にも支援を求め翌年二月を期し一齊に蜂起するという極めて大規模なものであつたが、しかしこの計畫は未だに發覺し、八九年には首謀者二十數名は嚴罰に處せられ失敗に終つた。<sup>(23)</sup> これは統治日淺いイスパニヤ政廳には大きな衝動を與へたに違いない。しかもこの事件の協役に日本人船長が参加していることは注目すべきことであつた。すなわちイスパニヤ人の調査によれば、一五八七年マニラに着いた日本商船の船長ファン・ガヨ (Juan Gayo) なるものは滞在中本事件の首謀者レガスピらとトンドにおいて相會合しこの計畫に賛成し蜂起の際は武器その他多くを讓渡すべきことを約している。<sup>(24)</sup> 八七年には松浦氏の船がマニラに來航したからガヨは松浦船の船長らしく思われ、それ以前松浦氏がフィリピン長官に武器援助を約している事から考え、イスパニヤ人を通じ、又原住民を通じフィリピンに通商の名目の下に武器の舶載を行つたものと考えられる。もとより同船長は事件發覺當時は不在であつたから處罰はなかつたものの、原住民の「隠謀」に日本人が干與していた事は當然再びイスパニヤ人の對日感情を昂めたものと見てよいであろう。

この事が其後のフィリピン在住日本人教徒に對する態度にも現われ前述のスパイ嫌疑ともなつたと考えられる。そして又このような空氣の變化は日本人の感情にも影響を與え、延いては積極的にフィリピン進攻を計畫するという形勢にまで立至つたものであろう。そしてこれら日本人中の一人として原田喜右衛門あり、又原田孫七郎があつたとみて誤りないと思われる。

すなわち彼らはフィリピン往來によつて先方の國情を熟知し防備力の薄弱さを知つたが武器を原住民に提供して反西運

動を起すことの不可能を見て敢て長谷川宗仁を通じ、秀吉の率ゆる武力を利用しようと計畫したものと考えられる。たゞ原田一族と長谷川宗仁との關係は尙記録に徴すべきものがないが、さきに松浦鎮信がフィリピン長官に書翰と送つた際、小西行長も夫々進んで武力の提供を約したことなどから考え、これら諸大名と「武器商人」との緊密な連繫の一端が推察せられるように思われる。秀吉のフィリピン招撫はこのような大名と商人との提携の上に秀吉の權威と征服欲とが加わつて試みられたものと思われる。

(五四、六、五)

註

(1) 岩生成一氏「豊臣秀吉の臺灣遠征計畫について」(臺北帝國大學文政學部史學科研究年報 第七輯)

(2) 本事件の概要については既に辻善之助氏の「豊臣秀吉の南方經營」(增訂海外交通史話所収)でも論述されている。

(3) Blair and Robertson, *The Philippine Islands*, 1493—1898.

Vol. IX. Pp. 61—2

(4) 本稿でおつては交渉の經過を敘述することは目的でない。それについて例えは奈良靜馬氏「西班牙古文書を通じて見たる日本と法律家」を見られよう。

(5) *Copia de la petición de los Japoneses, supplicando a D. Fray Domingo de Salazar, primer Obispo de las Islas mande frayles al Japon para la Conversacion de los naturales. Manila, 5 de Junio 1590*

(6) *Carta escrita por Notario Publico y Peticion que hacen los Japoneses en forma, en la cual piden les manden*

初期日西交渉史上の一問題

*trailes al Japon... En Manila, a 4 de Julio 1587.*

このビエラ・ピセンは或は喜右衛門かとも想像され、さすれば孫七郎と喜右衛門の關係より孫七郎の出自がヤリ判明するが尙疑わしう。

(7) Blair and Robertson, *The Philippine Islands* vol. V. p. 107

(8) Pastells, P. *Historia General de Filipinas*. Tomo II. P. CCXXXIII

(9) Juan Gonzales de Mendoza, *The History of the Great and Mighty Kingdom of China*. Vol. II pp. 31—34

(10) Pastells, P. *Historia*. Tomo I. p. CCIX.

(11) *Ibid* Tomo I. pp. LXII—III

(12) 例えはガブリエル・デ・モイヤの報告には「日本人は常に交易のためルソン島に来るが、彼らは銀を持来り金、蘇木、綿米を交換するが、」(Morga-Retana, *Sucesos de las Islas Filipinas*. P. 398)

三三

- 又「レンドナ」の報告でも日本人のルソン島との交易に「銀と交換に金を交換すること」の「レンドナ」がある。(Pastells, Historia Tomo II P. CCXCVIII)
- (13) 村上直次郎氏「貿易史上の平戸」附録「二」
- (14) Aduarte, Diego de. Historia de la Provincia del Santo Rosario. I P. 249
- (15) この間の経緯については岡本良知氏「一五九〇年以前に於ける日本ノイリピン間の交通と貿易」(史學第十四卷第四號)を讀む。
- (16) Colln-Pastells, Labor Evangelica. Tomo I. P. 353
- (17) Blair & Robertson, *Op cit* vol VII. P. 165
- (18) この十一人の日本人の氏名については前掲の Carta escrita … (東洋文庫所藏寫本)と中村拓傳氏が紹介された「マタリ」の國史秘録館 (Archivo Historico Nacional) の秘録によつて參照せらるる Hiroshi, Nakamura. Les Cartes du Japon. (Monumenta Nipponica vol. II. P. 109) 大體左の如くである。
- Juan de Vera (博多生れ), Tacana Niem, Baltasar Garnal (豊後生れ), Pablo Faranda Ziem (都生れ), Jeronimo Batanambe Zemoxero (豊後生れ), Andres Gonzales Ambraya Yafachiro (平戸生れ), Joachin de Vera (備後生れ), Gabriel Nagano Yoyamon (都生れ), Juan Yananguita Cuenlemo (堺生れ), Juan Yamamoto Josogiro (博多生れ), Leoa Gimniso Isogiro (博多生れ),
- (19) 譯文は岡本良知氏「日本耶穌會とフィリピンの階修道會との論争」(キリシタン研究第三輯所収)二五六頁)
- (20) Pastells, P. Historia. Tomo III P. CCXXXIII
- (21) 本制度については江本傳氏「フィリピンに於けるトリノトといつ」(南方民族第七卷二號)に詳しく叙述がある。
- (22) Blair and Robertson *Op cit* Vol VII. P. 99
- (23) このガヨといふかたる人が判明しない。タヌマンの東方傳道史 (Guzman, Luis. Historia de las Misiones P. 500) や耶穌會年報には同名の人が見えるが別人らしいと思われる。
- (24) Morga-Retana. Sucesos. P. 412 nota 56.

Problems on the Early Negotiations between Japan and Spain  
— about Hideyoshi (秀吉) "Pacification" toward Phillipines —

By K. Yanai.

Different opinions have been shown concerning the causes of a series of diplomatic negotiations which in the end of the 16 century, *Hideyoshi Toyotomi* (豊臣秀吉), after bringing the whole country under his rule, carried out. One lays stress on *Hideyoshi's* personal intention and another on the desires of the commercial capital in Japan. I will take up the intercourse with Phillipines for several years after A. D. 1591. And above all from the international circumstances around Japan at that time.

I will consider the reason why *Kiemon Harada* (原田喜右衛門) and *Magohichiro Harada* (原田孫七郎), who are regarded as direct leaders, gave *Hideyoshi* an advice to conquer the Philippines. It is my opinion that they belong to weapon-merchants visiting Philippines and that the strong plan of foreign expedition, conspired by the *Daimyos* (諸大名), [*Sojin Hasegawa* (長谷川宗仁), *Yukinaga Konishi* (小西行長) etc.] and those merchants, was combined with *Hideyoshi's* personal lust of conquest.